平成26年第３回教育委員会会議
報告事項（５）

義務教育課

1　報告事項　　平成２５年度沖縄県学力到達度調査結果

2　趣　　旨

沖縄県学力到達度調査は、本県児童生徒一人一人の基礎的・基本的な知識・技能及びこれらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の定着状況を把握するとともに、各学校における授業改善の充実を図るために実施する。

3　実施期日及び対象

(1)　小学校　　平成２５年１２月４日（水）　　第３学年・第５学年の児童
(2)　中学校　　平成２５年１２月５日（木）、６日（金）　　第２学年の生徒

4　実施教科

(1)　小学校　　国語、算数
(2)　中学校　　国語、社会、数学、理科、英語

5　問題及び各学年の児童生徒数、平均正答率

当該教科における学習指導要領の趣旨を踏まえた客観性のあるものとする。小・中学校ともに調査問題は、「知識」に関する内容と「活用」に関する内容を含める。

＜小学校＞

学年・教科		児童数	平均正答率
三年	国　語	15,344	66.5%
	算　数	15,281	78.0%
五年	国　語	15,511	63.8%
	算　数	15,514	68.4%

＜中学校　２年＞

教　科	生徒数	平均正答率
国　語	14,811	70.2%
数　学	14,805	47.5%
理　科	14,827	39.1%
社　会	14,814	52.5%
英　語	14,852	53.8%

6　調査結果のまとめ

(1)　小学校国語（３・５年）
「読むこと」は改善がみられるが、「書くこと」や自分の考えを広げ、深めることに課題がある。
(2)　小学校算数（３・５年）
第３学年から落ち込みが見れらるので、早めにつまづきを把握し個へ対応する必要がある。
(3)　中学２年国語
「書くこと」、特に目的 や必要に応じ根拠を示して自分の考えを書くことについて課題がある。
(4)　中学２年数学
正答率30%未満の生徒の多くは正負や文字式の計算、方程式など基本的な計算が不十分である。
(5)　中学２年理科
観察・実験の結果などを整理・分析した上で、解釈・考察し説明することに課題が見られる。
(6)　中学２年社会
歴史的分野や自分の考えをまとめたり、記述する部分に課題がある。
(7)　中学２年英語
「話すこと」には改善が見られるが、「書くこと」、特に文構造や語法の理解が不十分である。

7　調査結果に基づく対策

(1)　小中学校：自校の調査結果を分析・考察し、全校体制で共通理解した上で、各教科の年間指導計画を見直し授業改善に生かしている。また、県教育庁 HP に掲載される到達度調査結果の「各教科の県平均正答率」等と自校の状況を比較・検討し、全県下における自校の位置を把握した上で、「各教科の状況」や「指導のポイント」を参考に授業改善を行い、学力向上推進に生かしている。
(2)　各市町村教育委員会及び各教育事務所:
管内学校の調査結果を把握・分析し、学校経営や授業改善への指導助言等に生かしている。

到達度調査のまとめ（小学校）

小学校　第３学年　国語

○　領域別にみると「読むこと」の領域に改善の傾向がみられる。
○　「話すこと・聞くこと」の領域において、昨年同様、話の中心に気を付けて聞いて質問したり感想を述べたりすること、自分の考えを書くことについて課題が大きい。
○　「書くこと」の領域において、文と文との続き方に注意しながら、つながりのある文を書くことに課題がある。
○　「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の正答率は昨年度比－14.6％となった。引き続き系統的な指導が必要である。
○　学年別配当漢字の「読み」「書き」については問題によって定着にばらつきがあり課題である。日常的な生活の中で活用する必要がある。
○　主語と述語との照応関係や役割の指導について、昨年に引き続き課題がある。

小学校　第３学年　算数

○　低学年までの「数と計算」領域における基礎的・基本的な知識及び技能の内容については、相当数の児童ができている。各学校とも、丁寧な指導が行われていると考えられる。
○　第３学年で学習した問題の正答率が下がる傾向にあるので、早めにつまずきを把握し、個への対応を行うことが必要である。
○　各領域の内容に応じて、具体物操作等を適切に取り入れた授業を展開することが必要である。
○　記述で解答する問題の正答率が低く、無解答も増える傾向にある。低学年の段階から自分の考えたことを表現したり、友達に説明したりする学習活動を取り入れることが必要である。
○　算数用語は、授業の中だけでなく、日常生活においても意識的に使い、理解させることが必要である。
○　授業と家庭学習を連動させた取組が重要である。

小学校　第５学年　国語

○　主に知識を問う問題（一二三四五）の正答率は69.25％（昨年比＋10.65）
　　主に活用を問う問題（六七八）の正答率は51.05％（昨年比－17.05）
○　「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」において改善傾向であるが、漢字の画数や筆順、ローマ字の表記などが継続した課題である。
○　筆順の指導については、原則を踏まえつつ、間違えやすいところに注意した指導及び毛筆の指導が必要である。
○　本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることに課題がある。指導にあたっては、自分の考えの根拠を持たせ、引用し、相手意識・目的意識を持って文章を書く指導が重要である。

小学校　第５学年　算数

○　算数教育でも、言葉の力が思考力・表現力の基礎として重要であることから、算数用語をきちんとおさえ、算数の用語と用語を結び付ける言語等（～から～まで）を意識した授業を展開することが必要である。
○　低学年で学習した事項についても、高学年で繰り返し指導することが必要である。
○　記述式の設問の正答率が低く、無解答率も高くなる傾向にあることから、与えられた条件を基に筋道を立てて考えたことを振り返り、論理的に表現する活動を取り入れた授業を展開することが必要である。（例：式の意味を言葉で説明できるようにする。）
○　実際の生活場面で活用できるように、身の回りにある具体物を観察、操作するなどの活動を取り入れた授業を展開することが必要である。
○　授業と家庭学習を連動させた取組が重要である。

到達度調査のまとめ（中学校）

中学校　第２学年　国語

○　基礎的・基本的な知識・技能について、文脈の中で適切に語句を使うこと（同音異義語、副詞、接続語など）は改善の傾向がみられる。一方、文脈の中で漢字を正しく書くこと、単語の類別や表現技法について理解することなどは依然として課題であり、ドリル学習や反復的な学習にとどまらず、各領域における言語活動の中で具体的に指導するとともに、各教科等の授業を含めた日常の言語活動の中で使わせるよう意識付けることが大切である。

○　領域別にみると「読むこと」に改善の傾向がみられる。一方で「書くこと」に関する設問は全て課題があり、特に目的や必要に応じ、根拠を明確にして自分の考えなどを書くことについて課題が大きい。単元を貫く言語活動を通して書く内容や形式などを明確に示し、着目した理由やその内容について自分の考えを丁寧に書くように指導するとともに、複数の観点から自分の文章を見直し、より良い文章にする学習活動を設定することが大切である。

中学校　第２学年　数学

○　「関数」「図形」「資料の活用」について課題がある。「図形」において、基本的な公式や性質の理解が不十分である。立体図形の表面積や体積については、展開図や模型に触れさせ、公式へつなげるなど、体験的活動を重視する必要がある。　「関数」「資料の活用」において、基本的な「数学用語」の定着を図るために、数学用語を用いて説明をする活動を行うことで理解を深めるようにすることが大切である。

○　基礎的な計算問題が確実にできるようにする。正答率30％未満の生徒の多くは、正負や文字式の計算、方程式など、基本的な計算の理解が不十分である。そのため、補習指導や個に応じた宿題の与え方などを工夫する必要がある。

○　到達度調査や全国調査の活用を問う問題を、年間指導計画に位置づけ授業で扱うようにする。

○　各問題の誤答を分析し、授業改善に生かすことが大切である。

中学校　第２学年　理科

○　観察・実験の結果などを整理・分析した上で、解釈・考察し、説明することに課題が見られ、観察・実験を通じた理科の学習指導の改善・充実が必要と思われる。

課題の見られる単元は、正答率から「身の回りの物質」（29.2％）、「大地の成り立ちと変化」（19.9％）、「化学変化と原子分子」（29.9％）となっている。

特に課題の見られる設問は、濃度の計算であるが基礎的な計算に関する課題は、昨年度の沖縄県学力到達度調査（圧力、密度）や全国学力学習状況調査（電力量、浮力）等でも同様に見られる傾向であり、指導方法の改善と徹底した指導が望まれる。

基礎的・基本的な知識を活用して、観察・実験の結果などを分析し解釈すること（火成岩の組織、気圧配置）やモデルを用いて推論すること（化学反応モデル）に課題がみられることから科学的な根拠を基に観察・実験の結果を分析し解釈する学習活動に重点をおいた授業改善が必要である。

中学校　第２学年　社会

○　歴史的分野に課題がある。

特に古代や中世日本の歴史問題の正答率が低い。問題についてはそれほど難易度が高いものではないことから、授業における既習事項の確実な定着と確認が必要である。

対照的に近世日本の歴史問題の正答率は比較的高い。出題内容が戦国時代の比較的生徒になじみのある分野だったということと、学習時期がテスト実施時期と近かったことが正答率のアップにつながったと考えられる。

○　自分の考えをまとめたり、記述する部分に課題がある。

資料から読み取れる事項をまとめて記述したり、重要語句を使用して文章をまとめる問題の正答率が低い。特に歴史的分野では、授業において時代を大観させる場面を設定し、各時代の繋がりや、時代の大まかな流れを確認することが大切である。

中学校　第２学年　英語

○　基礎的・基本的な知識・技能の定着をみる問題については「話すこと」の領域において改善が見られた。活用する力をみる問題については特に「聞くこと」と「書くこと」に課題がある。

「書くこと」については、まとまりのある文章を書く活動については改善の傾向が見られるが、文構造や語法の理解が十分でなく正しい文が書けない課題がある。

○　「英語の授業づくり」の視点から、次のことを実践したい。

（１）単元指導計画作成において、指導に用いられる教材の題材や内容について、英語学習に対する関心や意欲を高め、英語で発信しうる内容の充実を図る等の観点を踏まえ、４技能を総合的に育成するための活動になるよう更なる指導方法の工夫改善を図る必要がある。

（２）毎時間の授業は、語彙力、文法力などの基礎的・基本的な知識技能の習得及び活用する力を育むことを目指し、提示する英語表現の使用場面と言語の働きを示し、１日１英文以上のスキルを身に付ける授業実践を行いたい。